

ほんとうの自分を求めて

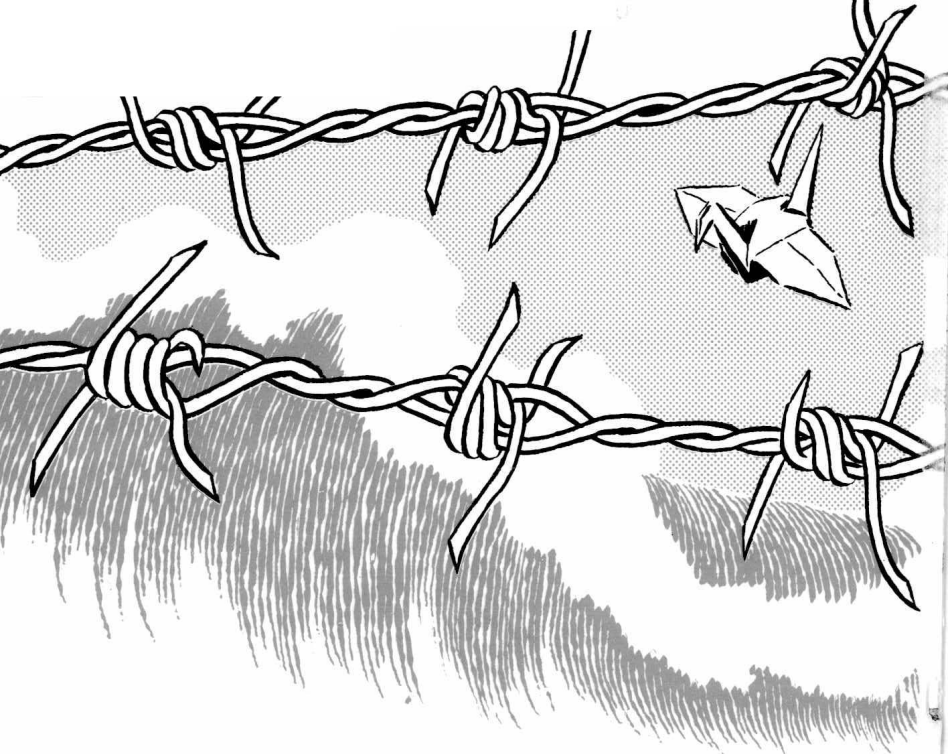


姫田忠義

ちくま少年図書館36

心の相談室





ほんとうの自分を求めて

姫田忠義

著者略歴

1928年9月兵庫県に生まれる。神戸高商卒業。現在、民族文化映像研究所所長。「アイヌの結婚式」など、数々の貴重な記録映画を製作。おもな著書に『森林への期待』（全林協刊）がある。

筑摩書房／1977年初版

229pp/18.8cm/四六版



1977年5月15日 第1刷發行

1980年12月20日 第4刷発行

著者 © ひめ だ た よし
姫 田 忠 義

發行者 布川角左衛門

發行所 株式會社 ちくましょぼう 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (營業)

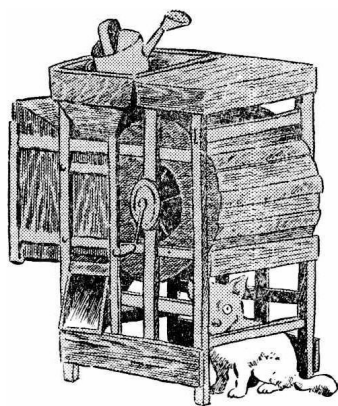
電話 東京 (294) 6711 (編集)

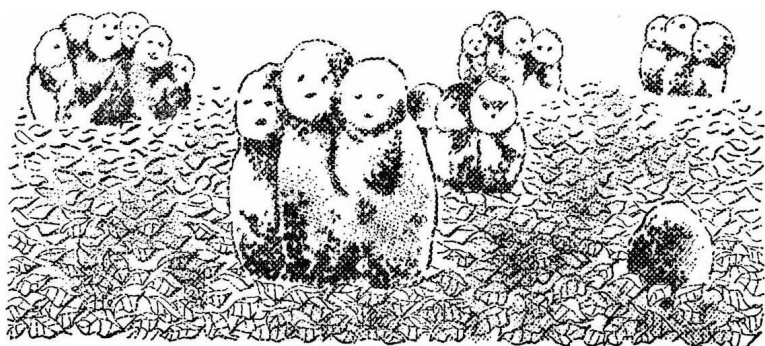
郵便番号101-91 振替・東京6-4123

Printed in Japan 厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8010 (製品) 04036 (出版社) 4604

ほんとうの自分を求めて





もくじ

はじめに——旅で考える

教えられる旅

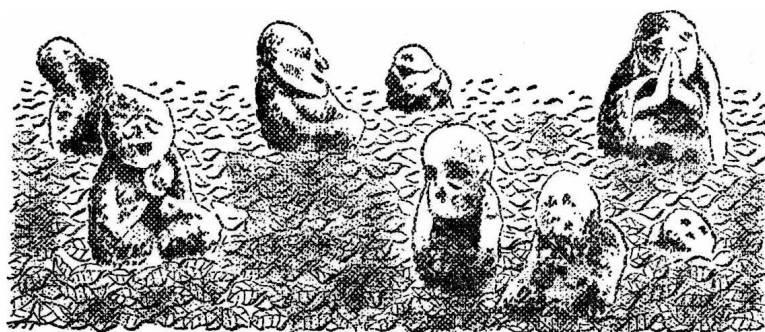
人また人と出会う　旅ということばの意味
よりよく生きるために

したくなかった旅

八歳から働いた父　七十歳でたおれるまでの旅

少年期の最大の旅

複雑な心　少年飛行兵として　なにかもお
しまいだ　母の必死の旅



自分で考え、自分の力でする旅

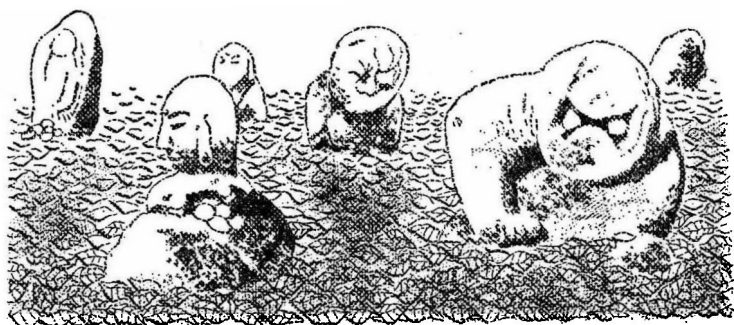
はじめての島原ゆき　すべてが珍しい山の生活
吉原さんの死　生きてるやつは不潔だ　もど
かしい自分にいらだつ

迷いつづける旅

人間とは何か　汗だくの会社づとめ　芝居の
世界へ　このままではだめな人間になってしま
う　激動期　浮浪者にまちがえられる
実感のある世界がほしい　退職

新しい生き方を求める旅

一冊の本　東京での苦しい生活　宮本常一先
生との出会い　あれほど打ちこんだ劇団を去る



ひとり旅

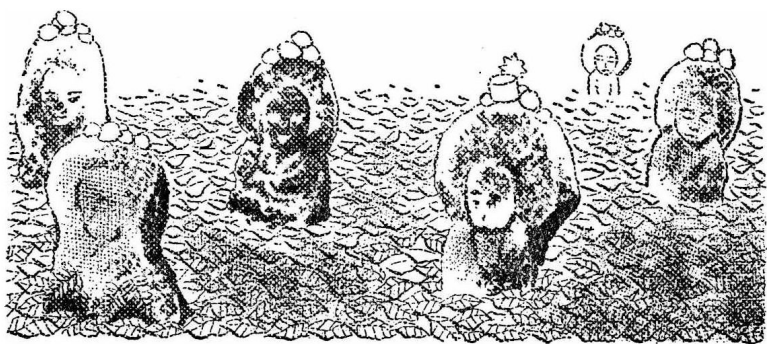
はじめからやりなおし　今晩とめてください
 李^リラインがあつたころ　対^つ馬と朝鮮　自分の
 ことを話すために生きてきた

歩き、見、聞く旅

すさまじい山^{さん}岳修行　未知の世界をゆく　開^{かい}
 拓^{たく}者^{しゃ}たち　こえるために登る山　土から聞い
 た学問　自然はだれのものだろう

すばらしい人に会った旅

人間と対等のアイヌの神　失われゆくことば
 アイヌ語とのむかいあい　あんたはおれのウタ
 リだ



おわらない旅

日本とは、日本人とは、そして自分はなにものか

あとがき

さし絵
勝又進かつまたすすむ

はじめに——旅で考える

人生は旅だ、ということばがある。

いつごろ、どんな人のいったものか私は知らない。けれど、このことばを思いだすたびに、私は胸がしめつけられるような気がする。

「人生は旅だ」

— なんといいせないことばだろう。

人が歩いて行く。どこへ、なんのために。それは、本人にもわからない。ただひたすらに歩く。人に会う。その人もまた歩いている。手をとりあい、ゆくえをたしかめあう。曙光のほの見えるときもある。けれど闇もつつく。手をとりあっているはずの人を見失うこともある。つかれもする。へこたれもする。けれど立ちどまるわけにはいかない。ひたすら歩かねばならない。どこまで、いつまで歩かねばならないのか。

旅とはそういうものではないか。そして人生というものもまたそういうものではないか。

だから、せつないのだ。

が、せつながってばかりはいられない。覚悟^{かくど}をきめなければならぬ。旅とはそういうものだ、人生とはそういうものだと思ひさだめなければならぬ。

人生とは旅だ、ということには、そういう人間の思ひさだめ、覚悟がにじみでている。

「あなたはよく旅をなさっていらつしやるようですが、ひとつ旅について本をお書きになりませんか。あなたご自身の旅について、筑摩書房^{ちくましょぼう}の人からそうすすめられたとき、私はひじょうにちゅうちよした。

なぜって、これまでの私自身の旅を書くということは、私自身のこれまでの人生を書くことになるからだ。そしてそれは、とても人さまに語れるようなものではない。なしとげたといえるなものもない、いきあたりばったりな生きざまの連続だ。

「よく旅をする」という意味では、たしかに人並み以上かもしれない。二十歳代の後半に関心を持ちはじめた民俗学^{みんぞくがく}という学問の勉強のための旅もある。ほとんどおなじころはじめてテレビや映画の仕事のための旅もある。そしてそれらを総合するために仲間といつしよに創設^{そうせつ}した民族文化映像研究所の仕事の旅もある。旅にでている日数も年とともにふえ、最近は一と月に数日家にいられるかいられないかだ。

世間一般の人から見れば、たとえばひと月に数日しか家にいない私は「よく旅をする」部類の人間であろう。けれど世のなかには、量的にも質的にも私などよりはるかに「よく

旅をしている」人がたくさんいるのだ。ぶつづけに数か月、数年、十年、二十年、外国へ出ている人たちもいる。そして日本のなかでも、たとえば農山漁村からの出かせぎ者のように、一年の大半を旅先でくらししている人たちもたくさんいる。それらの人の旅の長さ、きびしさにくらべれば、私の旅などものの数ではない。そう考えれば考えるほど、私が自分の旅のことを書くなど、おこがましいかぎりに思えてくるのである。

その私が、この本を書く決心をした。

理由は、これまでの私の旅、私の人生は、二度とふたたびくりかえすことができないし、また他のだれのものもとりかえることができないということである。私にとっては、そういうかけがえのないたいせつな旅と人生を、私自身がそまつにはいけない、せめて文字にでも書きしるしておかねばならない、私はそう思いさだめた。そしてそうすることがまた、これまでの私の旅と人生の途上で出会い、私をささえてくれた多くの人びとへの返礼にもなる、とも思った。

ふりかえってみると、これまでの私の旅も人生も、ただいっしんになかを求めているものだったように思える。それがなんだったのか。ひよつとしたら、ただいっしんに自分らしく生きよう、自分らしく生きようとしただけかもしれない。ほんとうの自分を求めてあがきつづけてきた、といえるかもしれない。そしてそのあがきのなかで、私は私なりの発見をしてきたといえるかもしれない。ささやかな、けれどそれぞれが私にとっては重大な

発見をだ。私はそれを見失ってはならない。そして、これからの旅と人生の上に生かしていかねばならない。

人生は旅だ、ということばのせつなさをかみしめながら、である。

教えられる旅

人また人と出会う

昨年（一九七五年）十月、私はひとりのアフリカ人とおわかれをした。

その人は、東アフリカにあるタンザニア共和国の人で、東アフリカの共通語であるスワヒリ語を教えに日本へやってきていたが、予定の一年間がたつたので帰国することになったのであった。

私が彼と知りあったのは、一九七四年の十月、私が彼の国、タンザニアへ旅したときであった。あるテレビ番組の取材の旅であったが、さてこれから日本へ帰ろうというときになって彼に出会った。タンザニアの首都ダレスサラムの空港のロビー。彼もまた日本へむかおうとしていた。日本までの機内ではとなりあわせにすわった。彼は、流ちょうな英語が話せた。けれど私はめっちゃめっちゃな英語。でも、けっこういろいろな話をした。話す時間はあるほどあった。

彼の一年の滞在はあつというまにすぎた。その間に彼と会ったのは、わずか三回だけであつた。私のほうが旅でいそがしく、家にいることが少なかったからである。

私は彼に会うのが楽しみであつた。私の家族もそうであつた。彼は二度、私の家に来てくれた。私たちは、彼からさまざまなことを教わつた。

彼がはじめて私の家へ来たとき、こんなことがあつた。

小さいちやぶ台のままで長い足をおりまげてあぐらをかく彼の姿勢のことから、日本人の生活習慣と彼の先祖の地であるアラビア半島のオーマンの人の生活習慣とがにているという話になった。彼はアラビア系タンザニア人だったのだが、そのオーマンでも、ふだんあぐらをかいてすわるし、また玄関ではきものをぬいで家にはいるというのである。あぐらのこともさることながら、玄関ではきものをぬぐという話は、私には意外であつた。

はきものをぬぐという意味では、タンザニアに行くまえにたちよつたパキスタンやイランの回教寺院で、人びとがはきものをぬいで内庭にはいつていくのを見たことがあるが、しかしふつうの家のなかでそうするのは見たことがなかったし、また家のなかの構造もはきものをぬぐようにはできていなかった。そのパキスタンやイランの向こうのアラビア半島の一角で、日本人と同じようにはきものをぬいで家にはいり、あぐらをくんですわる習慣のある人たちがいるらしいというだけで、私はうれしくなった。そしてそのオーマンの人の血をうけたという彼の存在が、ぐんと近いものに感じられたことであつた。

大晦日の夜、私は彼を年の瀬の東京の下町を案内した。そして町の食堂にはいり、私の

家族や友人をよんでいっしょに朝鮮式の焼肉を食べた。アラビヤ人やアフリカ人の食生活のことなど話題はつきなかった。

彼の帰国を知らせる電話があったとき、中学二年の長男がぼつんといった。「サリムさんがいなくなると、日本はさびしくなるなあ」。けっして誇張とは思えなかった。

わかれの日、東京六本木の喫茶店で彼とむきあいながら、私は胸がつまってものがいいなかった。

わかれねばならない時間がきた。彼にはまだほかにたさなければならぬ予定があった。私は、なんとかわかれにふさわしいことばをいおうとあせった。

ひよこっと一期一会といふことばが頭にうかんだ。一期一会というのは、ことばどおりにいえば一生に一度の出会いということだが、いつごろからか、私はこのことばを「永遠のわかれ」を意味することばのように思うようになっていた。一生に一度しかない出会い、それはつぎの瞬間には「永遠のわかれ」になる、出会いとわかれとは二つにして一つだ、そう思うようになっていた。

その一期一会ということばが、ひよっこり私の頭にうかんだのである。

「ばかッ、なんてことばを思いだすんだッ」、私は自分で自分をしかった。「おれはそんなことをいいたいんじゃない。また会いましょうといいたいんだ」。そのくせ「永遠のわか

れ」を意味することばを思いだす、そのとんちんかんさかげんに私は自分で腹がたった。

サリムさんのそばには、彼の日本滞在たいざいちゅうのいっさいのせわをされた守野もりのさんという人がいた。守野さんは、スワヒリ語の研究者で、英語も達者な人だ。私は守野さんにたのんだ。「日本には一期一会いちごいちえということばがある。けれど私は、またあなたに会いたいと熱望している、と伝えてください」。一期一会ということばに私がこだわったのは、「また会いたい」ということばだけでは、私の氣持の何十分の一しかないあらわせないように思っただけであった。

守野さんのことばにじっと耳をかたむけていたサリムさんが、聞き終わると同時ににかスワヒリ語でいいはじめた。守野さんにそれを書いてもらった。

Vilima kwa vilima havikutani

ヴィリマ クワ ヴィリマ ハビクタニ

lakini binadamu hukutana

イアキニ ビナダム フクタナ

(山 また 山と 出会わず

人 また 人と 出会う)

書き終わって守野さんは、さらにこうつけくわえていった。「山は動かないけれど、人は動くことができるからね」。

私はハッとした。そしてサリムさんを見た。アラブ系の人特有のあの奥深く大きい目を